

5. 好きな言葉

人間万事塞翁が馬

白石裕二氏の好きな言葉に、「人間万事塞翁が馬」がある。

中国の古典には数多くの人生訓がある。「人間万事塞翁が馬」は、淮南王劉安が学者を集めて編纂させた『淮南子』（10部21篇）からの引用である。劉安（紀元前179年～紀元前122年）は前漢時代の武帝でもあり学者でもあった。

「人間万事塞翁が馬」の意味は、人生の幸不幸は予想できずやってくるが、幸が不幸に、不幸が幸にいつ転じるかわからないという意味である。この意味の先を付け加えるならば、幸や不幸のたびに一喜一憂する必要なく、白石氏の言葉を借りれば「たとえ悪いことがあっても挫折しても、次はええことがあるよ」という前向きな解釈ができる。人生は選択の連続であるが、白石氏の人生にも多くの選択があった。「これがいいとおもって選んでも悪い結果になることもあるけど、つづけていればまたいいことがある。そんな感じよ」と白石氏は笑う。つまり、「禍福は糾^{あざな}える縄の如し」が「人間万事塞翁が馬」につづくのである。この故事は、『淮南子』と同じ前漢時代の歴史家・司馬遷によって編纂された『史記』（計130巻）の「南越伝」からの引用である。馬と縄。

昔は馬を扱うのに縄を馬の首や頭部に巻きつけていたらしいが、人間がそんなことをしても馬は「塞翁」の「馬」のように自由に逃げ出すのである。思いどおりに動かそうとしてもそうはいかない。人の生と同じである。



6. 若者へのメッセージ

自分に自信を持って、もっと自己表現してほしい

最近、教育の現場において白石氏がおもうのは、「今の若い子はえらいですよ。情報量いっぱい持ってて、何でもよう知っとるよ」と感心させられる一方で、携帯電話などの普及でコミュニケーションの手段がガラリと変わり、昼休みでも友だちとおしゃべりせず携帯電話やスマートフォンを片手に個人個人がバラバラに過ごしているのを見ると、不思議な違和感を覚える。白石氏が声かけを積極的におこなっても、生徒の「ひとりの世界」に割り入るのはなかなか難しい。生徒にしてみると、小さい頃からそうした環境に慣れておりそれが普通のことでも、白石氏は「どうしたもんやろ、今までのやり方が通用せんのかな」と悩みつつ、個人個人がもっと自己を表現できるような環境づくりに諦めず励む。なぜなら、モノづくりはモノが相手でも協働のなかでおこなわれ、さらにモノの先にはそれを使う人がいるからだ。一人前の技術者になるにも、face-to-faceのコミュニケーションが基本である。

「ひとりの世界」を好む時代に、高校を卒業後すぐに専門校に入学してきた生徒のなかには、自分の殻に閉じこもりコミュニケーションが不得手な生徒もいる。しかし、どんなに表現がうまくなくとも、生徒一人ひとりを見ていると素晴らしい能力を持っている。「その能力を見い出し引き出してあげること、そのために生徒を好きになること、そして生徒自ら殻を破れるように環境を準備してあげること。」白石氏は、これらのことを毎日心がけ、自然体で生徒と向き合う。2018年度の修了生のなかには、技術的にも人間的にもたいへん成長した生徒がいる。入学して1年目は何もしゃべらなかったが、2年目に「先生、これはこうやった方がええんじゃない？」と自分の意見を言うようになった。そして、2年間の学びをへてタオル業界で活躍している。「その子の持っている筋やとおもうけど、こうし

て化けてくれると嬉しいよね」と白石氏は言う。諦めずに何度も繰り返し声かけし、専門校の教員みんながタッグを組んで環境づくりをし、手間を惜しまず生徒たちに接することで、生徒の本来持っている能力がうまく引き出され将来に繋がる。本来、教育とはこういうものであり、地域のコミュニティのなかで「社会的実践への参加」を促すことにあるのであろう（R.N.ベラー他、中村圭志訳〔2009〕『善い社会』みすず書房、164頁）。

白石氏は、専門校で学ぶ生徒たちに次のようなことを願っている。1つに、ここで学んだことを生かしてタオルマイスターを目指してほしい。2つに、今治のタオルを世界に広めてほしい。3つに、分業によってつくられるタオルだからこそ、地元の人たちと協力してモノづくりにとり組んでほしい。

白石氏をはじめ専門校の教員から薫陶を受けてタオル業界に就職し精進している教え子が、たまに専門校に顔を見せに来たり社内技能検定で会ったりすると、「先生に会ったらホッとすると話してくれる。専門校で学んだ生徒がこうしてタオル業界で頑張っている姿を見ることが、白石氏の元気の源になっている。

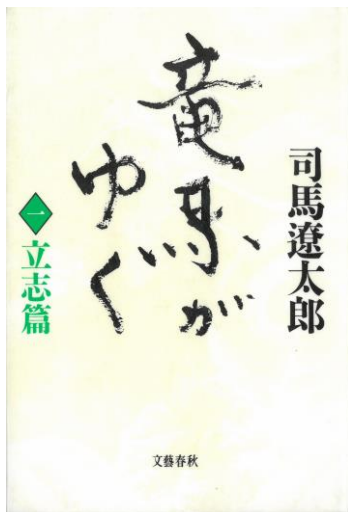
7. 好きな本

人情味あふれる歴史小説が就寝時の友

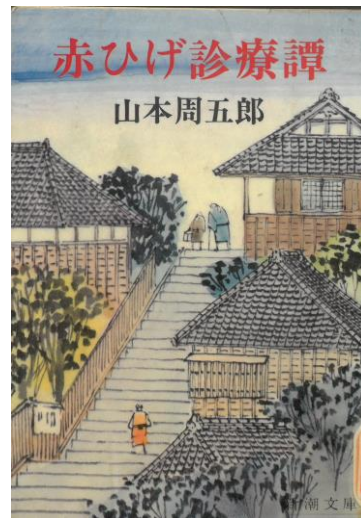
白石氏は、読書好きである。近年は読書が寝る前の眠り薬のような役目を果たしているが、とくに歴史小説を好んで読む。鼻^{ひいき}眞の作家は、司馬遼太郎や山本周五郎、藤沢周平、宮部みゆきである。

司馬遼太郎の作品のなかでは、四国にゆかりのある『竜馬がゆく』（文藝春秋）や『坂の上の雲』（文藝春秋）が好きで、読み終えたあとに舞台になった場所を何度も訪れている。司馬遼太郎の描く歴史小説の主人公は実在した人物ゆえに、その地を訪れるのはなおさら

感慨深い。坂本龍馬の生まれた高知や最期の場所となった京都、秋山好古・真之兄弟、正岡子規が生まれ育った地元の愛媛など、物語の風景を思い浮かべながら歩くのが楽しみのひとつである。司馬遼太郎で「旅」と言えば、紀行文集の『街道をゆく』（朝日新聞社）も愛読書である。司馬遼太郎が見たであろう風景をいつか行脚したいとおもっている。



司馬遼太郎『黄馬がゆく』（立志篇）文藝春秋、
1988年新装版（今治市立図書館所蔵）



山本周五郎『赤ひげ診療譚』新潮文庫刊、
1964年（今治市立図書館所蔵）

山本周五郎の作品では短編集が面白く、『赤ひげ診療譚』シリーズ（新潮社）や『さぶ』は心を打たれる。フィクションであるが、何回も繰り返し読んでいるうちに、世の中の不条理に心を痛めるが、それに負けない人情味溢れる人物像が感動を呼ぶ。（完）



参考文献

愛媛県経済労働部産業雇用局労政雇用課 [2019]「愛媛県立産業技術専門校入校ガイド」（2019年度版）。

愛媛県立愛媛中央産業技術専門校 [2019]「施設内訓練コースの概要（令和元年7月）」（愛媛県産業技術専門校提供資料）。

辻悟一 [1982]『えひめのタオル八十五年史』四国タオル工業組合。

R.N.ベラー他、中村圭志訳 [2009]『善い社会』みすず書房。

編集後記

「白石さんを『タオルびと』でとり上げたい」と長年思いを温めてきましたが、このたびそれが実現しました。事の始まりは、以前偶然目にした新聞記事（読売新聞「導く者たち えひめの群像⑪」『読売新聞』2012年6月10日朝刊）に白石さんが載っており、「タオル製造に係わる人は裾野が広いなぁ」と感心したと同時に、「人材育成の側面からぜひ話を聞いてみたい」とおもいました。新聞の記事を読んだ際は「タオルびと」発刊前であり、ただ漠然とそうおもっただけでしたが、およそ7年の月日をへてお会いできました。



タオルづくりに携わる人材がいなくなるなか、白石さんのように人材を育成できる人材も少なくなっています。白石さんご本人は「もうそろそろ現役を引退したい」とおっしゃっていますが、地元はそれを許しません。白石さんに代わる後継者がそう簡単に見つからないからです。それほど白石さんのキャリアは分厚く、「One and Only」という表現がしっくりいく教育者だからです。「どんな人にも良さはあるんですよ。その良さが自然に内から出てくるような環境を与えてあげることがわたしの使命かな。」そう話しをしていた白石さんの終始優しい笑顔が印象的でした。（辻）

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の26人目は、織鶴タオル有限会社代表の片上義春氏である。今治に優れたタオル職人は何人もいるが、そのなかでも独自路線をひた走っ

てきた孤高の職人である。自分の信念を曲げずモノづくりに邁進してきたため、多くの敵もつくってきたが、かけがえのない仲間もできた。今回は、抜きん出た技で独自のモノづくりをおこなう片上氏に自らのタオルづくりの歴史について語っていただく。

